

カフカの『流刑地にて』

稲垣大陸

序

疑問の余地を残さない地平、絶対的な正しさを意味する世界に『死刑宣告』の主人公ゲオルク・ベンデマンの父は住んでいる。フランツ・カフカの父・ヘルマン・カフカもそうである。彼らの意見と思想と命令は絶対的であり、間違っているもの、罪を感じべきものは、常に息子たちである。過去に於いて日本の社会はきびしい身分制度のうちにあり、武士が絶対的な権力を握っていた。武士階級以下の商人とか農民がほんのとるに足りない理由で、武士に斬り捨てに会ったのである。ゲオルクの父も絶対的な権力のうちにあり、息子は批判も非難も不可能であった。彼は自分の当然の権利も主張できず、自由のない、束縛された、地獄のような家庭で、自らの弱さと力のなさや罪を実感するばかりである。父のなすところは常に正しく、子の罪は疑う余地のないものである。全体が全く野蛮な、原始的な世界であり、単純な掟の支配する世界である。

こういう命題、父のなすところは常に正しく、子の罪は疑いのないものである、という基本的命題を再び小説の世界に具象化したのが、カフカ自身良いと認し、終りの数ページを除いて満足していた小説『流刑地にて』である。終りの部分は作者には確かに気に入らなかったが、『変身』、『死刑宣告』とともに出版された小説であり、『変身』後、ページ数からいっても、もっとも長い、カフカの実りある時期の小説、内容的にも、外的形式からみても、もっともがっちりとまとまり、完成をみせている小説で、1914年10月に書かれた。

灼熱の太陽のもとに、血の臭いのする異常な舞台、残酷な拷問機械、われわれの日常生活とは全く縁のないような、特殊な世界、氷のような無感覚と巧妙な策略……非情、不合理、異常性、特殊性にもかかわらず、実は現代の人間とその心理、内面状況と深くかかわりをもっているのである。

「この世界を、純粋なもの、不変的なものに高め得たときにのみ、幸福は得られるものである。」とカフカは書いている。『流刑地にて』を書いた頃、日記に彼は自分が置かれている状態をいくらか完全に把握できたと満足感を記しているのである。

1

士官にとっては前司令官の行政方針や、流刑地に於ける裁判の方法、及び処刑方法はあたり前のこと、当然にして、明白なことであり、彼は処刑と拷問の自動機械を信頼しきってい

る。彼はこの処刑機械の人並はずれた崇拜者として異常なほど執着していた。士官がこの機械の手入れをする際の熱心さ、旧司令官の自筆の図面に対する慎重な取扱いは探険家には理解できないくらいであり、まるで自分の手足を動かすようにその機械の操作に熟達していた。灼熱の砂漠のような谷間で、士官は重い軍服を着ているのである。士官にとって軍服は故国を意味するのであった。故国の栄光に満ちた、すばらしい過去を回想する。士官は探険家に説明する。説明を要約すれば次の通りである。罪は絶対的なものであった。疑う余地のないものであった。この処刑機械が囚人の肉体を犠牲にして、判決を下してくれるのである。馬鍬が囚人の肉体に与える苦痛が罪を許してくれるというのである。囚人は死ぬと同時に罪から解放されて、救われるのである。囚人が責めさいなまれて、六時間後に示す表情、知性と叡知の入り混った表情を眺めるものは、自分も装置のベットに横たわりたい気持ちにさせるといふ。「この装置のもっとも注目すべき点は、犠牲者に罪と処刑を歎びとして認識として体験させることにある。」

装置の各部分がどんな働きをするか、その機能を実に正確にくわしく説明する。そしてその説明は説明を聞く人、すなわち探険家を古いシステムの方へ引き入れ、それを支持してもらうことこそ、そのねらいなのである。処刑方法と古いシステムの掟である拷問装置とをこころよく思っていない新司令官と流刑地の高官の意見を士官に有利なように変えさせるために、旅行者は士官に協力して自分の高い地位を利用しなければならない。士官はこのことのために、今や必死である。機械のすばらしさを探険家に認識させようと懸命であるが、この裁判手続に反対の気持を抱く探険家を動かすことができぬばかりか、装置は故障しそうな雑音をたて、旅行者は旅行者で反対意見を卒直に述べる。士官は機械の模範的な機能を探険家にみてもらおうと、自ら処刑機械の犠牲者となる。しかし、機械は士官が説明したようには働かない。歎びと認識としての罪と処刑が目指されていたにもかかわらず、探険家の目撃したものは、それとは全く正反対のことであった。士官はくし刺しにされて、死を遂げ、装置はその熱狂的な信奉者と共に崩壊し去るのである。この士官の死は全く劇的であり、読者には奇異な感じを与える。さて士官の説明したとおりにはならなかった。説明されたことと現に起ったこととのくいちがいには、作者のイロニーが感ぜられる。裁判長であり、裁判権の所有者である士官、裁く者が裁かれる運命となり、裁きの主体が裁きの客体に入れ替っている。士官が機械のすばらしさ、精巧さを信頼しきって説明したさいのあの確信ぶりを思うとき、この出来事（士官の不本意な死と機械の崩壊）は全く不可解な、信じがたいことに思われ、またこの出来事の事実を知ってから士官の自信にみちた説明を思い起すとき、それは全く滑稽であり、悲惨な気がする。もっとも絶対視していたものも、必ずしも絶対的なものでなく、場合によっては相対的なものとなりうる不安、神さえも死ぬという現代に於いては士官の考えの中心をなす罰と罪の古いシステムの神話は崩壊せざるをえぬ必然性のうちにあったのである。

士官は後に見るところであるが、『死刑宣告』の友人と共通するカフカの分身であるが、士官にこのような死を遂げさせることによって、カフカは純粹、純潔、自己処罰、禁欲という理想、即ち純粹な自己を *ironisieren* しその内面的な矛盾をあばきだし、その憐れむべき点に風刺的に光をあてたのである。ゾーケルはこのようにいっている。士官はその信念、その意志が常に堅固で、終始一貫し、目的に向かって一路邁進するという点で、「純粹」である。しかし矛盾と問題点は彼がゲオルクのように分裂的というのではなくて、主観主義のうちにある。矛盾は彼が現実を直視していないことから起る。士官が自分の正しさを探険家に納得してもらえないのも彼の考えが余りに主観的すぎて、現実と矛盾しているところが、大きな原因である。現実世界から大きく隔絶し、現実世界から取り残されて、いたずらに過去の幻影におぼれ、幻影にとりつかれている、その主観主義が問題である。

士官は絶大な権力と説得力をもった旧司令官の唯一の後継者、支持者として、自分もかなりの権限をもち、勢力をもちかえそうとしている。少なくとも囚人を古い手続きで死刑できる権限をもち、勢力をもちかえそうと計画している。しかし最後に囚人が拷問装置から釈放されて、当の士官が囚人の役目をひき受けるとは何という逆転であることか、囚人が釈放されることによって、彼が苦痛による救いを得られなかったのは、彼にとって幸福なのか不幸なのか、それは問わないとして士官があれほどペダンティッシュに説明したことが、士官の身に起らないということは何というイロニーであろう。士官は何故装置のベットに身を横たえるのか、探険家の拒否によって、彼の生命というべき装置の間近い破壊と終焉が明確になったこと、そしてそのことから装置の破壊と終焉はとりもなおさず、士官の存在の破壊であり、滅びを意味するということを士官は認識したからである。

士官の死については次のような解釈もある。絶対的な力と旧司令官の権限を信ずる士官が助けを求めることは不自然というのである。古い制度とそのシステム、古い掟と裁判制度に相当な自信をもつ士官が、この流刑地のシステムや事情にうとい外国人にすぎぬ探険家に援助を依頼すること自体、古い刑罰の論理とシステムを維持するために、いかにその人物の影響力を高く評価しようとも、よそ者を利用すること自体、あのような純粹な自信家の行為として一貫性を欠く、不徹底な、不適切なことである。従って彼はこの点でも罪を犯しているのである。なぜなら支援と協力の要請は結局は彼が忠実に仕えてきた、彼の支柱である掟、絶対的な掟を傷つけ、掟に違反し、掟を破る冒瀆的なことである。処刑装置という苦痛と死による救済を約束する立派な遺産に対する裏切り行為である。客観的情勢を観測する彼の力量は新しい司令官を中心とする勢力の増大を認める点では多少あるとしても、事実上現実離れし、砂上の楼閣のような感じのする士官の発想と思考内容である。彼の判決文“*Sei gerecht*”は *Politzer* によれば、「汝が他人になした正義を汝に対しても行なえ。」という意味であるという、この解釈は明快で分りきったことであるが、これが正しい見方であるためには、一つの前提条件が必要である。即ち士官の心理と思考行程に於いて、自分の助けを

乞い求める行為が誤まりであるという反省と自覚があるということである。このこと、つまり掟を傷つけ、掟に違反し、掟を破る冒瀆性に気づき、自らの罪を悟ることが必要な前提条件である。この意識と自覚を考えないならば、この解釈の成立は無理なことは至極当然であろう。

2

旧制度のシンボルである装置のもっとも印象的な自壊作用の描写は次の通りである。「録写機の蓋が徐々に持ち上って行ったかと思うと、やがて、ぱたんと音がして、すっかり開いた、とともに、なにかの歯車の歯が、迫り上るように、現われてき、やがて、その歯車が、全貌をさらけ出した、さながら、なにか途方もない力が、録写機を圧搾したために、もはや、この歯車を容れる余地が、なくなったかのようなのである。」大小さまざまな、無数の歯車が、つぎつぎに現われては下に落ち、砂の上を転がっては横倒しになる。これは装置のもっとも重要な、装置の生命ともいえる歯車装置（Räderwerk）の不調と機械崩壊のすざまじい場面である。一体、どうしてこの精巧な機械がこういう風な崩壊をとげるのか、何が崩壊の原因であるのか、機械のこのような最期をいかに説明すべきであろうか。このことをしばらく考察しよう。

1921年の10月20日の日記にカフカは、みじかい眠りの中で見た夢を書いた時の記述に次のようにある。「罰が迫りつゝあるとき、ぼくがこんなに屈託なく、確信にみちて、幸福で、ようこそと迎え入れていることのうちには、幸福が生まれる。」この文体から感じとれることは、罰に対する好意と歓迎の気持である。罰を好感のもてる来客のように感じている。罪のある者にとっては、罰は罪の解消であり、救済であるわけである。ところで、士官は「正しくあれ」と書き込んで、死のうとする。では今までの彼の行動は全て正しくなかったのか、彼には救済の必要がない筈である。士官は自分は正しい、何の罪もないと確信している筈である。そういう彼が装置のベットに横たわるとき、その結果はどうなるかは、はっきりしている。罪を感じ、意識している者は罰を正義として受けとる。なぜなら、彼は罰せられることを望んでいるからである。

装置はたゞ単に人間を苦しめ、殺す道具ではない。たゞちに殺してはいけない、平均して十二時間をかけてやっと殺すものでなくてはならない。Politzer は「カフカは処刑が十二時間続くということのうちに、罪の永遠、贖罪と洞察の無意義さを把握しようとしたのである。」と云っているが、この装置はまず拷問、苦痛を与え、しかる後に死を与えるのである。苦痛と苦悩だけがこの機械の目的ではない。それによって理性をめざめさせ、浄化と変容に到らせることである。「流刑地」はナチの強制収容所を予言しているとも考えられるが、この装置が、浄化と変容の装置でもある点が、それとは違うところである。カフカは1922年2月1日の日記に次のように記している。「素朴な眼で見るとき、本来的な、異論の余地のない、外部のなにものにも（殉死、他人のための自己犠牲）損われない真実は、肉体の苦痛だけ

である。苦痛の神が初期諸宗教の主要神でなかったのは（そしておそらくやゝ後になってはじめてそうなっただけなのは）不思議だ。」変容に到る道は苦痛である。異論の余地のない真理であるところの肉体の苦痛は認識と変容に到る手段である。苦痛の中で、我々は本来の自己、感覚をもつ肉体を認めることができる。ちょうど胃の患者が胃の存在を意識するように。苦痛の中でのみ、意識と身体間の分裂が消え去ると、ゾーケルは云っている。死刑装置は囚人たちに苦痛による変容を約束するものである。囚人たちは苦痛と生命の代価を払って、罪を許してもらい、救済を得る。そして囚人が贖罪し、救済を得ることの意味は、彼が自分を否定し、流刑地の掟を肯定するということに他ならない。囚人の使命は自己と上なる力との完全なる出会いである。囚人は自分の身体に傷を刻みつける。上なる力の意志を苦痛によって信じ、その意志を信頼し、決して背を向けないことである。

「死刑装置の機能はベッドの上の囚人と力のシステムの意志を一致させることである。」とゾーケルは書いているが、士官はこの装置の機能に逆らったことをなすことによって、装置を破壊してしまうのである。士官は力のシステムの一部であり、上なる力の意志と完全に一致した人物である。そのような人間は装置のベッドに上る資格のないものである。装置の要求する条件に満たない欠格者といわねばならない。純粹、孤独、禁欲、特異性などの性格をもつ士官を装置はどうして変容と認識に到達させようか。士官は装置に不可能なことを要求して、その目的と機能にそむくという過失を犯している。それは不注意というよりも、探検家の拒絶に会った彼としては仕方のないことであつた。士官を侮辱したのに対して、“Ehre deinen Vorgesetzten !”（汝の上官をうやまえ！）という Schrift（文字）を録写機の上におくように、本来 gerecht でないものにのみ “Sei gerecht !” という Schrift を提示できるのにもかかわらず、士官は gerecht の権化であるような自己に対して “Sei gerecht !” をかゝげた。ここに士官の誤まりがある。gerecht であるものが、更にそれを強固なものにするために自らに gerecht を要求することはありうるであろう。しかし装置の録写機の上のべき Schrift は性質上、そういうものではなかったのである。装置の目的は囚人の身体に彼の罪状を刻むことによって上なる力の絶対性と全能性を思い知らせることであつて、力の全能に執着している士官はこの目的に反するものである。

装置の最大の関心事は苦痛とそれによる認識と変容の浄化の招来である。士官はそれを旅行者の前で証明しようとした。しかし士官は浄化も認識も変容も経験できなかった。拷問ではなく、直接の殺害であつた。馬鍬は字を書かず、いきなり突き刺したのである。そればかりか歯車は壊落し、装置は崩壊して去つた。罪の意識のない士官には救済としての罰は下らない。歓迎の気持で迎えることのできる幸福を生み出す罰は。十二時間も要する罰は下らない。罪を感じる者にとってのみ彼が罰せられるとき、正しいことが行なわれているという実感をもちうる。罪を感じ、意識する者たちは罰され、苦しめられることによって、罪を知るのであるが、士官は罪を犯すことによって刺し殺されるという罰に達するのである。という

のも士官も力に対してある要求をかゝげるという重大な罪を犯しているからである。囚人たちに於いては罰は原因であり、罪はその作用であるが、士官に於いては罪が原因であり、罰が結果である。それも士官がいままでにないような *Schrift* をかゝげることによって、齒車装置を転倒するようなことをしたからである。その為に装置は正常な活動を停止し、士官をくし刺しにするのである。「約束された贖罪のしるしは発見できなかった。ほかのすべての者がこの機械の中で見出したものを士官は見い出せなかったのだ。」

士官の罪は力に対する要求であると言いたが、士官は力の一部である自分、即ち小さい力、あるいは上なる力に対して下なる力に対して、「正しくあれ」と要求するという誤まりを犯したので、それが罪であるという意味である。流刑地の法則、掟、流刑地の象徴である拷問装置に対して「正しくあれ」と要請することは僭越なことである。神はよいお方なので、よいことを欲したもうのではなくて、よいことはそれが神が欲したもうことによって始めてよくなるのである。それと流刑地に於ける力も同様である。力は正しいことを欲するから、力のなすことは正しいのではなくて、正しいのは、全て力がなしたことだからである。力は正しくないことをなすことができないのである。それが力の唯一の不可能なことであって、(全能の神も自殺ができないということがあるように。)従って「正しくあれ」ということは流刑地の掟、力にとっては不必要なことなのである。このような意味でゾーケルは次のように云っている。「士官は装置の意義と本質とを合理化し道德化しようとした、それによって不可能なことを要求した。」繰返し強調すれば、上なる力は絶対的なもので、何ら道德化も合理化も必要としないのである。だから流刑地とはある意味で、正義が力をともしなわぬために挫折するところ、力のない正義が無に帰せられるところと云えるであろう。力とはかくしてこのように非合理的なものである。有無を云わせない性質の、暴君的なものである。さて士官の行為のうちにある罪とは、「正しくあれ」という合理的、論理的目的を録写機に課すことによって、絶対的な力の意志を根拠づけようとしたことである。絶対的な権限をもっていた偉大な権力者である旧司令官の時代の理想に共感をもち、装置という祭壇で献身的に働く一方で、この装置の非合理的システムを合理化しようとする矛盾のうちに、士官は自分だけでなく、自分のもっとも愛した装置をも破壊に導くのである。正式に裁判も受けず、弁明の機会も与えられず、自分の罰せられる理由となっている罪もはっきり知ることなく、長時間の苦痛のあとにやっと、犯人はそれを知るといふ非合理的な世界を合理化しようと試みたことは、時代が変りつゝあるときにもなお、古い権力者の姿の魅惑のとりこになっているものの行為として、やゝ矛盾し、分裂的な感じがする。この分裂が装置崩壊の直接間接の原因となっているのである。全装置の働きがいかに素晴らしいものかを探険家に実証しようとしたことが、機械の機能を停止させ、運転不能となり、崩壊へとおいやるのである。

3

カフカはいつも自分の存在を問題にし、存在を語る作家である。『死刑宣告』のゲオルクの家庭は、明らかにカフカ自身のそれである。ゲオルクと彼の父の関係はカフカと彼の父の関係である。カフカの家庭は彼の父が絶大な、絶対的な権限をもつ流刑地のようなものである。流刑地にあっては無条件に上官の命令に服従しなければならない。『流刑地にて』以前の作品での父と子の関係が、この作品での上役と下役の関係という官僚的なものに移行している点は注目しなければならない。ともかく上下の関係が支配と服従によって成り立っている。上にあるもの即ち、父、旧司令官、上官は命令を与える権威あるものであり、下にあるもの、即ち、息子、囚人、兵士は、厳命におびえ、苦しみ、隷属するものである。暴君のような父の犠牲者としてのゲオルクは家庭の悲劇に出会った人である。拷問と死刑の装置によって死んで行った幾千の人たちも彼と同じ運命に出会った人たちである。権力と力のない、弱いものの罪と過失とは論ずるまでもなく、何の弁解も自己正当化も絶対許されないカフカ（ないしはゲオルク）の家庭の象徴、或いは比喻として流刑地を考えることは当を得たことである。権利の当然の主張も抵抗もできぬ、このような家庭での最大の抵抗はゲオルクのように黙って父の判決に従うこと、囚人のように、犬のように従順になること以外にないであろう。

わかりよく理解するために、『死刑宣告』と『流刑地にて』を比較し、共通性を指摘してみたが、更にそれを押し進めてみよう。『死刑宣告』のゲオルク・ベンデマンは一人の女性と婚約し、事業に成功する。独身生活に終りをつけ、事業に対して意欲的である。つまり、過去と訣別し、現状を変革し、未来に生きる青年である。彼に相当するのが、新司令官であり、彼はこの流刑地の象徴である処刑機械の残酷さ、非人道的な仕方に反対し、裁判制度を廃止させようと秘かに企てているのである。古きものを非とし、新しきものに変えていこうとする点で、彼ら二人は類似している。ゲオルクが許嫁に影響されるように、新司令官もとまりまきのご婦人たちの影響下にあるのである。何よりも注目しなければならないのは、ゲオルクが事業に於いて父親を邪魔物のように片隅に押しやり、無力化しようとするのだが、新司令官は流刑地において彼の前任者の精神を押しつけ、排除しようとする。処刑機械の礼讃よりも、港湾事業の方が彼には重要なのである。過去から受け継がれた遺産と伝統を重要視せず、つまらぬ、どうでもよいものとする点で、彼らは共通しているといえよう。ゾーケルはゲオルクをベンデマン商会の新司令官であるとしている。

そうだとすれば旧司令官はゲオルクの父親に相当する。彼は前時代の絶大な権力者で、すべてを一身に兼ねそなえていたが、今は、死んで、地下に眠っている。丁度息子にいいくめられて、老衰で寝ている父のように、この父がベテルスブルクの友人と連絡をとり、勢力をもりかえし、巨人のようにゲオルクの行く手に立ちはだかるが、旧司令官も予言されたとおり、復活するであろうか。二人はカフカの作り上げた偉大な巨人、神話的人物である。

囚人は上官の命令にそむき、そればかりか、上官を噛み殺そうとする動物的感觉の持主であり、父に反抗し、従わないゲオルクが、その不従順と穢らわしい欲望のために、父から死刑を言い渡されるのとよく似ている。

新司令官と対立する立場にあって、旧司令官の遺産である、処刑拷問装置の熱烈な讃美者である士官は『死刑宣告』のいかなる人物に相当するのであろうか。士官は旧司令官の残した拷問装置と裁判制度を維持しようと懸命であるが、支持者は新司令官の時代になってからは、ほとんどいなくなる。昔は刑執行の時には、見物客であふれそうになるが、今では装置そのものが、古ぼけ、さびれ果て、関心をもつものも少ない。流刑地に於いてさえ、人々は死刑装置とその信奉者、士官に対して背を向けつつある。そうした状況にあって士官は孤独であり、時代はそれにかかわりなく進展して行く。社会が彼を見放し、彼も社会の情勢に対応しえないという点で、士官は、ゲオルクの友人、寒い北国ロシアへ逃がれ、その地で、仕事に失敗し、世間と没交渉の孤独な、独身生活を送る友人に似ている。士官は装置の部品の維持の面で、財政的に困っているが、その点でもそうである。

反社会的、反時代的存在、自己と両親と幼年時代に忠実な特異な例外者、変化を嫌悪し、使命感に燃える保守的な熱狂者。

そのような存在として当然の敵は、ゲオルクのように独身生活に終りを告げて、婚約し、婚約者と共謀して、父を無力化し、事業の上で、一個の独立した一人前の商人として成功することを目ざす男、あるいはご婦人連に取囲まれて、過去の偉大な拷問と死刑の装置を等閑に付し、讃美すべきこの儀式をとり除こうとし、世俗化した事業、近代的商業に力を注ぐ男であり、彼らの計画はうち砕かれ、罰せられるべきである。ペテルスブルクの友人は少年時代に忠実に独身を通すばかりか、父と結託してゲオルクに罪を自覚させようとする。罪とは父に逆らい、父に背を向けるその不従順さである。父である旧司令官にさからう新司令官を罰するために、士官は探險家を味方に抱き込もうとする。友人も士官とともに根源に対して忠実であり、常に頼るべきものは彼らにとって根源なのである。友人にとっては少年時代であり、士官にとっては旧司令官とそのシステムである。士官は熱帯の燃えるような暑さの中でも祖国を示す重い制服を着ているのは、祖国に対して忠実であるからである。

根源への忠誠をそこなうものは女性であるので、友人も士官も女性から遠く離れているばかりか、敵対意識をもっている。古い秩序を裏切るものは、女性の危険な影響下にあるものなので、士官は極度の女嫌いである。流刑地が女性化され、かつての掟とその厳格さが失われていくのは、士官にとっては不本意なことであろう。士官が囚人から婦人用のハンケチを取り上げるのも、こういう感情から囚人を罰するためである。

友人のいる、氷のように寒い北国ロシアの風土と流刑地の熱帯の炎熱の太陽に焼きつけられる砂地とは対照的である。しかし友人と同じく士官は恐らく独身で女性との交渉もなく、彼らを取り巻く風土も、彼らと同じく乾燥し、不毛の、人をよせつけない土地なのである。

『流刑地にて』と『死刑宣告』の理念上の大きな違いは後者に於ける、自己犠牲と禁欲は無罪と相等しく、商売上の成功と欲望は罪と同等である、という命題が前者に於いては成り立たないということである。根源に対して忠実なる者、即ち士官が没落し、滅ぼされ、死刑の宣告を受け河の中へ投身するゲオルクに相当する新司令官が、彼は古き時代からの伝統とその精神を否定し、排除しようとするのであるが、生き残るのである。『流刑地にて』はその意味で、カフカの作品系の中での一つの転回を示す重要な小説と云えるであろう。父親の手のとどかないところへ逃げ、ゲオルクのようにあえて父との対決を行わない友人に相当し、彼以上に積極的に思想上の父とも云える旧司令官のシステムとその理想を追求し、そのシステムの中以外のところででは生きることが拒む士官が罰せられるのである。従来の作品の理念どおりにこの小説が書かれたならば、恐らく士官は囚人を釈放することはせずに、十二時間をかけて囚人を苦しめ、死に至らしめるという構成になったであろう。ゲオルクが自殺することによって、「道を誤った生活」を、誤謬を訂正し、父の懷に帰り、父と和解し、そのことによって、父と息子の意志が統一されたように、囚人の意志は上なる力の意志と一つになったことであろう。力の意志に立ち帰り、その意志を受け容れたであろう。

4

古きものに対しての裏切り者が、『流刑地にて』では罰せられたい、という真理が把握されたが、流刑地に於けるような仕方囚人が苦しめられ、処刑されることの意味、罰の意味を追求することも、この作品を理解する一つの方法である。囚人が苦痛に耐えかねてうめきながら、遂にはうめき声をあげる力もなくし、認識と浄化にたどりつくという、かつての流刑地での宗教的な儀式、民衆のお祭りは何を意味するのであろうか。第2節で、囚人は自己を否定し、流刑地の掟を肯定すること、上なる力の絶対性と全能性を肝に銘ずることと書いた。それでは囚人が裸で装置の上にのぼるということは人間が生れて来るときのように、死んでからも裸で主のみ前に立つことの比喻であらうか。そして囚人が死刑執行の日の前数日間、食事をとらせないということは宗教上の断食の比喻であらうか。食欲など、人間のもつ動物的な面、全ての欲望を断つことは、上なる力の意志にかなうことである。囚人が自己を否定するということは、自分の動物的、本能的な性質を捨て去ることである。否定の対象である自分とは何であるか。それは何の理念も理想もなく、動物のように本能的にさまよっている自己である。欲望を押さえ、禁欲的になること、欲望の極度の強調は、つまり自分の身体に苦痛を与えることに通じ、これが禁欲の最高の形式であらう。なぜなら身体に快楽でなく、苦痛を与えることだからである。単に欲望を断つだけでは消極的である、積極的に肉体に傷をつけ、苦しめさいなむことである。

禁欲の強調と肉体を責めさいなむこと、全知全能の父の意志（みこころ）の絶対的な正しさ、死と救いと的一致とその深い確信という点で、流刑地の本質はきわめてキリスト教に近

い。ゾーゲルはしかし次のように云っている。「一方ではこのような解釈には種々の困難が付随する。流刑地では決して彼岸ということは云わないし、死後の裁きとか、永遠の生命ということも問題にならない。またこのシステムは愛ということを知らない。キリストの神は愛であるにもかゝらず、士官の合言葉は愛ではなくて正義である。このことがキリスト教との根本的な違いである。士官にとっては人間よりも変容機械の非のうちどころのない機能の方により関心が深いのである。」であるならば囚人が処刑される意味は何であろうか。また装置が崩壊後の流刑地はどうであろうか、このことを考察したい。

囚人は自分の罪を知らない。判決の内容は自分の身体にますます深く刻み込まれていく傷で出来た文字から読みとらねばならないのである。微動しつづけるベットの上で長時間をかけて判読する。上にある録写機と下にあるベットの上下の関係は象徴的である。上なる力の意志が下にあるベットにねかされた囚人の身体に判決の文字を刻みつけていくのである。(ここで文字 *Schrift* は *die heilige Schrift* 聖書を連想させるし、判決文「汝の上官をうやまえ。」はモーゼの十戒の一つ「汝の父をうやまえ。」を想起させる。) グレゴール・ザムザが虫に変身するのは、ベットの上のことであるし、ゲオルク、ペンデマンはベットの上の父から決定的な判決を言い渡される。また、ヨーゼフ・Kがある朝突然逮捕されるのもベットの上のことである。カフカに於いてはベットはいかがわしい意味はなく、そこで啓示をさずかる意味をもっている。しかもこれらの主人公と同じく囚人はどうして罰せられるのか分っていないのである。カフカの描く人々(主人公)は説明のつかないもの、謎のように不可解なものに出会った人たちである。何という不安であろう。いつ、いかなる形で、どのような罰が身にふりかかってくるか分らぬ不安。それは人間存在にはつきものでき離せないものであろう。解き明かすことの不可能な力に見据えられている不安、囚人もヨーゼフ・Kもそのような力の支配下、影響下にあるのである。変身も死刑宣告も訴訟も受刑も一つの神秘である。彼らには未知なる力をどう解釈し、説明すべきであろうか。

流刑地の罪と罰のシステム、その代表的な存在である処刑機械を計り知ることのできない生(人生)、ないしは現代社会、強大な国家権力と解することも出来るであろう。上層幹部の方針にいやおうなく服従しなければならない官僚機構、大きな機械の単なる一つの歯車として、奴隸的な生活を強いる社会に於いては、ちょうど囚人が弁明の機会をもたなかったように、個人的な発言は全く無力なものと等しいであろう。文明化され、機械化され、非人間化した現代社会に於いて人間らしく生きることはもはや不可能となっている。

処刑機械に表象されるものを強大な国家権力と解するならば、囚人や兵卒で表わされるものは、国家主義、帝国主義下の主体性のない、愚鈍な民衆であり、国民の姿であると考えられよう。囚人の姿は何と受身的で憐れであることか。士官と探検家の間にかわされる会話もフランス語なので囚人には全く理解できないにもかゝらず、ついでいこうとするところなど、全く愚かしいことである。兵卒はなんと生氣のない顔であろう。自分の行動がどんな意

味をもつかを考えることもなく、一口の粥をぬすみ喰いすることにしか生きがいを感じるこのない哀れな存在である。ところでこの拷問装置がその熱狂的支持者の士官を道連れに分解し、解体してしまふことの意味は強大な権力に対する痛烈な皮肉であろうと思われる。カフカは洗練された、野蛮な国家権力の抬頭とその衰退を予言したのであろうか。

探險家は流刑地の非人道的な裁判制度を認めることはなく、この制度に敵意を示す新司令官に希望をもつ。士官に勢力回復の協力を求められても拒否するが、しかし彼は処刑機械崩壊後の流刑地をどう評価するか。その評価は決して積極的なものではない。士官が拷問機械にのぼるのを喜ぶ囚人のような愚かな人間までが権利を主張しはじめる社会になるであろう。処刑機械の代りに来るものは理想も理念もない平凡な社会、死刑から解放され、人道化されたとはいえ、その不快さにはまゆをひそませざるをえぬような社会が来るであろう。栄光にみちた過去の残忍な理想の代りに来るものは失望と嫌悪を抱かざるをえない流刑地の生活形式であり、探險家ならずともカフカ自身、船出してそこから一人逃避したい気持ちになったことであろう。カフカは「平等化は或いは正しいことかもしれない。けれども、あまりに極端な客観化は人生の可能性を破棄してしまう。」と書いているが、社会が民主化、平等化されることは進歩であるし、よいことかもしれないが、平等化、平均化することは、個人の素晴らしい成長をさまたげ、偉大な天才の出現を不可能にしないと限らない。装置解体のあとに続くものはそうした、下らない、愚かしい、平凡な文化、女性的な柔弱な社会である。士官は探險家に向って叫ぶ。「新司令官の許にあって、新司令官を動かしている、あの女どものために、みすみす、かような畢生の労作が滅失してしまっているものでしょうか。」しかし労作は滅失する。古い罪と罰と変容のシステム、旧司令官の唯一の遺産の信奉者、根源に対して忠誠を誓う者ではなくて、新しいシステムにカフカは結局は軍配を上げているが、彼は古い制度に対してと同様、新しい制度にも批判の目を向けている。

このように制度が古くても新しくても、人間が作った制度であり、制度を維持するのが人間である限り、決して住みよくなることはないのである。少なくともカフカはどちらに対しても否定的である。カフカは『流刑地にて』の終りの二三ページは不満で「作り物」と名づけている。1917年8月5日の日記をみると、装置解体後の流刑地では司令官ほか人々は蛇と女性を崇拜するようになる。古い制度では自動処刑機械が権力のシンボルであったが、新しい時代ではそれに代って専制的支配の座につくのが蛇であり女性なのである。人々は彼らのために休みなく、働かねばならないのである。この世界はすべて彼らの餌食となるのである。エムリヒはこれを「人間的な」産業社会という新しい悪魔的な“掟”と呼んでいる。「労働の無限の進歩の内に万人の万人の為の戦いのうちに、人間がこの世で自己を主張しつづけるとき、人類は滅びに至る。」と云っている。1916年10月11日に出版者の Kurt Wolff 宛にカフカは次のように書いている。「この最近の物語の説明のために、私はたゞ次のように付け加えます。この物語だけが苦しいのではなくて、われわれの一般的時代と私の特殊な時間も

同様に非常に苦しかったし、いまでも苦しいのです。……」ここで注目すべき点は、時称が過去形と現在形を併用していることである。古い時代も新しい時代も苦しいことでは変りがないのである。

5

『流刑地にて』の世界にはさまざまな対立がある。もっともはっきりしている対立は、士官と新司令官の間の対立である。新司令官側の意味するものが、人道的、民主的、複雑、優柔不断であるとすれば、士官側の性格は次のような概念で規定されると思う。即ち唯美的、封建的、単純素朴、純潔、行動的である。唯美的というのは彼が倫理性・道徳性を有せず、善悪の彼岸にある、かかる思考とイデオロギーの持主であるところからである。また純潔というのは彼が反社会的・反時代的であり、外界に順応することは全くなく純粹で上なる力、流刑地の古き罪と罰のシステムに、根源に忠実であるからであることは、いままでみた通りであるが、文字どおり純潔・清潔である。そのことは愛する拷問装置の手入れと清掃、何回となくバケツで手を洗う行為に明白である。彼が装置の操作を説明するさいのうっとりとした恭やしきは真実であり、罪のないものである。彼は非人間的なぞっとするような処刑に対して全く普通の人間とは異質の態度をとっている。ぞっとするような出来事をかくもペダンティックに即物的に描く士官の神経組織は常人のそれとはかけはなれたものである。処刑の残酷さについて士官は不感症であるだけでなく、彼には愛してやまぬ装置の正当性と人間的なることを証明しようとする情熱的に高められた精神力がある。「賞讃」の眼差で彼は機械を眺め、彼の確信はまことに敬意に価するものである。探険家が彼に云うとおりである。士官にとって旧司令官の遺した図面は「私がかかっているもののうちでもっとも貴重なもの」である。彼は自分のもつもののうちで最愛なものであるかのように機械の面倒をみる。彼は単に言葉で機械の機能と操作を説明するばかりでなく、手と足、身体全体を駆使してそれをなすその熱心さ、無邪気さ、感動的な分り易さは非人間的な処刑の残虐さときわだって対照的である。彼の装置への傾倒はそのよしあしは別として実に心を動かすに足るものがある。囚人のために愛する機械が汚れるとき士官は何と怒りに震えることか。

Kassel はこのように士官を把握するが、探険家もまた士官を同じように把握する。彼はその気持を卒直に士官に伝える。“Ihre ehrliche Überzeugung geht mir nahe, wenn sie mich auch nicht beirren kann.”士官が古い秩序とシステムに仕えるその忠誠は尊敬すべき、立派なものである。なるほど彼が仕えている古い秩序とシステムは決して尊ぶべきものでもないし、良くもないものであるが、彼の仕え方は尊重すべきであり、好ましいものである。士官にとって旧制度と処刑装置はその為に生き、その為に死ぬほどのものである。それだから彼はあれほどの信念をもって探険家を自分の味方にし利用しようとしたのである。しかしながらそのために生き、その為に死ぬというそのものは人間を責めさいなみ、

殺人を果す残酷な非人道的装置であり、進歩的、人道的、ヨーロッパ的、民主的な見解の探険家の眼にはとうてい正しくないもの、廃止され、止揚されなければならぬものである。流刑地にあつては決して裁判が多人数で行われることはないし、更に上級の裁判があるはずがないのである。

ここで注目すべきは探険家の姿勢である。彼は理性的には流刑地のシステムを非とし、感情的には士官に共感をもっているのである。探険家の姿勢にはこの点あいまいさがあるが、彼が作者自身の分身であり、作者の心情と相入れるところがあるとすれば、カフカは士官に対して必ずしも好感をもっていないとはいえないであろう。逆に従来の流刑地のシステムが滅んだ後の世界に対して批判的な断片を日記に書き込んでいるカフカであるから一層士官に対して必ずしも好感をもっていないとはいえないと推定されるのである。ゾーケルは探険家の態度、言葉にみられるあいまいさをアムビバレンツという心理学の用語を使って言いあてている。探険家は自分の性格にはない点、欠けている面を士官の姿のうちに見出し、それを讃嘆する。それは士官の行動にみられる純粹さと素朴さと真实性である。ゾーケルはいみじくも次のように云っている。「自由主義的、人道的なヨーロッパ人は客観性という理想のために行動をおこしにくくなっている。人間性を代償に、厳格に、首尾一貫して熱心に行動へとかかりたてる非合理的、狂信的なイデオロギーの信奉者を彼はしばしば嫉妬の眼差で見ているのである。」センチメンタルな人間がナイーブな人間に対して抱く憧憬と嫉妬と羨望が感ぜられる。そして感動と共感がある。

絶対的に正しいと信じていたシステム、非の打ちどころなく動く装置もまた解消し解体し廃止されることがある。これまでみたようにそれは滑稽な(lächerlich)ことである。説明と現に起きたことの間の不一致にはイロニーが感ぜられる。時間が作用して解体と廃止へ導かれるようなものが絶対的と呼べるであろうか。士官が信じていたものは時間にゆだねられたもので、永遠のものではなかった。士官はそれに気がつかない。しかし探険家はそれを見ぬいていた。彼は認識の人である。彼は行動はしない、ただ観察する。行動と観察を兼ね備えてはいない。観察の結果事態を変えようとししない。第三者的、客観的立場にあつて流刑地のシステムをある距離をおいて眺めるのみである。従つて士官の雄弁な勧誘にも屈せず、冷静に自分の判断を主張し断言できるのである。彼は最初は装置の説明なぞどうでもよいような無関心な態度であるが、熱心な士官の説明で次第にそれに関心を示し始める。しかしある程度の距離をいつも保っている。彼の内心は拷問機械の解体の時よりもはるか前から、かかる装置を廃止さるべきものとみなしている。

探険家はカフカの作品の中で全く新しい人物であると、ゾーケルは云っている。それはだいたい以上のような観察と判断をこととする認識の人という意味においてである。探険家は囚人のように判決を下されてはいず、また士官のように装置にかかつて死ぬこともない、ただそれを目撃するだけであり、判断を下すだけである。

カフカは彼の家庭を観察する場合、探険家と同じく家庭のあり方を批判しそれに裁断を下しているのである。彼にとって、「書く」ということは家庭という流刑地の病理現象を認識し、あばきだすことであり、絶対的な父の行動のうちにも正しくないこと、滑稽なことがあり得ることを洞察する意味があるのである。「書く」ことは彼にとっていわゆる「流刑地」を審判することであり、そこからの解放と内面的自由の獲得を意味する。罪と罰と変容の症候群、家庭という流刑地の本質を認識し、それを言語的に造形し得る能力の故に、カフカは非人間性の犠牲となったゲオルク・ベンデマンやグレゴール・ザムザの運命をたどることはなかったのである。彼の生きている世界のシステムを探険家のように局外者として観察し、描き出すことは文学においてのみ可能であったのである。自分が置かれている状態を分析の対象とし、それを整理し、それに名をつけ、口に出して言い、自ら語らしめる作家的能力によって、自分の置かれている状態を片づけ、そこから脱却し独立し、自由な領域に住むことが許されるのである。

(1970年10月15日)

参 考 文 献

- Franz Kafka ; Gesammelte Werke in Einzelbänden von Max Brod. S. Fischer
 Max Brod ; Franz Kafka
 Gustav Janouch ; Gespräche mit Kafka Erinnerungen und Aufzeichnungen
 Walter H. Sokel ; Franz Kafka, Tragik und Ironie, München. Wien 1964
 Wilhelm Emrich ; Franz Kafka, Bonn 1958
 Norbert Kassel ; Das Groteske bei F. Kafka, München 1969
 Heinz Politzer ; Franz Kafka, der Künstler, Frankfurt am Main 1965
 Jörg Thalmann ; Wege zu Kafka
 Helmut Richter ; Franz Kafka, Berlin 1962
 Klaus Wagenbach ; Franz Kafka, Bern 1958
 Tagebücher, 1910~1923
 Briefe, 1902~1924
 モーリス・ブランショ ; カフカ論 (栗津則雄訳) 筑摩書房
 藤戸正二 ; カフカーその謎とディレンマ 白水社
 キルケゴール ; キルケゴール著作集 白水社